

福島秋穂著『記紀神話伝説の研究』

神田典城

本書には一九六七年から一九八七年の二〇年にわたって著者が発表してきた論文二六編を収録する。その初出掲載誌は大半が早稲田大学国文学会発行になる本誌『国文学研究』である。

全体は素材及びテーマに従って六部に分たれている。本書の内容を理解するよすがともなるから、以下に目次を掲げておこう。

第Ⅰ部 第一章「イザナキ・イザナミ神話に関する二三の考察」第二章「ヒルコ神話をめぐって」第三章「洪水神話と原始水神話」第四章「鳥船考」／第Ⅱ部 第一章「記紀両書のヨモツヘグヒについて」第二章「記紀に登場する八雷神（八色雷公）をめぐって」第三章「記紀載録神話に見える櫛の呪力について」第四章「記紀に載録された呪物投擲逃走譚について」第五章「呪物投擲逃走譚統考」第六章「イザナキ神が剣を後手に振るることについて」第七章「我国古代における呪的行為の二三について」／第Ⅲ部 第一章「記紀載録神話における生と死の起源説明神話」第二章「死の起源説明神話について」第三章「生の起源説明神話をめぐって」／第Ⅳ部 第一章「失われた星の神話」第二章「ウケヒ

神話の構造」第三章「スサノヲ神のヲロチ退治譚」第四章「ヲロチ退治譚統考」第五章「ヤマタノヲロチの実体について」第Ⅴ部 第一章「稲羽の素戔嗚尊について」／第二章「大穴牟遲神の根国訪問譚をめぐって」第三章「大年神の系譜について」／第Ⅵ部 第一章「古事記」に載録された「三輪山伝説」をめぐって第二章「古事記」に載録された天之日矛の話の構造について第三章「古事記」に載録された天之日矛の話の話をめぐって」／付録「古代の心」

ここに一貫している考察の方向は、著者自身の言（あとがき）を借りれば「概ね、『古事記』や『日本書紀』に載録されている「神話」や「伝説」が、それぞれ如何なる觀念・思想に基づいて創られ、其の創作者或いは伝承・保存者たちにより、どのような意義を有するものと考えられていたかということ、考察したもの」となるわけだが、ことに「どのような意義を有するものか」ということと「どのような意義を有すると考えられていたか」とを峻別するところに著者の考察の基本姿勢が窺えるように思う。

また、記紀に載録されている神話・伝説を如何なるものとして眺めるべきかを著者は各論文で再三にわたって述べており、これも「記紀神話伝説の研究」なる書物の基本的理念であるから、同じく著者自身の記述からここに引いておこう。

「記紀両書にあっては、其の成立時或いは其れ以前の人々の思想・行動・生活様式を純然と記載せず、意図的に或いは全く無意識のうちに編纂者たちが其の真意を曲げて、伝えている場合が多い。しかし、私たちが我国の未開或いは古代の人々の思考や生活

の如何なるものであったかを探る場合、文献資料としてはこれらの書物に頼る以外に無いとなれば、私たちは其処に載録された記事を可能な限り正確に読みとらねばならない。本来甲であったはずの物語が、其の前後に接続される物語との関係で、或いは書物編集の趣旨に添うように、乙に変更されてはいないか、また丙の原意を有した物語が、記録文字の無い伝承の間に、或いは文献に載録される際に、伝承者・文献作成者の恣意的解釈を施され、丁の意義を持つものとして私たちの前に示されてはいないか、私たちが「文明人」として有するある種の先入観を基に、未開・古代人の行動・思考様式を斯くあつたはずと規定し終つてはいないか、私たちは、上記諸文献に記された未開・古代人の思想なり行動なりを眼にする場合、其れを記すそれぞれの書物が有した特殊性を勘案しつつ、未開とは、古代とは何であるのかを考えてみなければなるまい。」(第Ⅱ部第七章)

著者はこのような視点に立ち、伝承が生じ、それが記紀に載録されるまでにおこつたであろう人々の意識・解釈の変化を常に意識し、時に跡付けようとする。

ところで本書を一読してまず受ける印象は、随所に著者の誠実・慎重な人柄を思わせる記述が現われている点であろう。(因に評者と著者とはこれまでに出会つたことがない。)端的には凡例の項目が二四の多きを数えることなどにそれが数量的に現われているのを見ることが出来る。また各論文後載の注記——例えば第Ⅰ部第一章(以下Ⅰ—とする)注の2には、当該問題に関する論考を江戸期に遡って丹念に跡付けて二一編に上る文献名が掲

げられ、其の逐一に該当ページが付してある。この傾向は収録の二六編に一貫した態度と見受けられる。もちろんこのような注記の丁寧さについて殊更に特別なこととするつもりはないが、自戒的に言えば、先人の業績を博搜する手間を惜しむ、また顧みることとをしない研究が(評者も含めて)まま見られるところからすれば、以て範たるべき姿勢を自ずと示しているといえよう。

あるいは個別の言葉遣いにしても、通常は「記紀神話」ですますところを「文献載録神話」「記紀載録神話」と「載録」の二文字を加える、「神」「カミ」などを「超自然的存在(神)」と記すなど、それぞれの事項について自らが論じようとする趣旨にそつて正確な表現を期そうとしているのがよく分かる。

右に注記のことを述べたが、既説に対する目配りは無論本論のなかでもよく行き届いており、それらに対する疑問点の提示、当否の判断は概ね穏やかで妥当なものといえる。

ヲロチ退治を追及したⅣ・三・Ⅳ—四などに著者のそういう特質がよくあらわれており、ここに見る如き既説の紹介・検討は、評者のように、先人の蓄積になかなか目が届かず、しかも日頃いささか飛躍的な思考に陥る危険を感じつつあるような者などには大変有難い。また同時に、ヲロチ譚の系統の推察は事例も豊富で、資料の採集された時期を常に検討の視野に入れた手堅いもので、諸外国の類例を手掛かりに物語構成要素の変化・付加のものを特定してゆく手法は確かなものを感じさせる。

このヲロチ退治もそうだが、本書にはこのほか「生の起源の神話」の問題をはじめ、一つのテーマに対する著者の粘り強い探究

の跡を見ることが出来る(目次など参照されたい)。通常一つの論文で述べられることには限りがあり、あれもこれもとなると全てに不徹底になる恐れがある。そこを複数の論文により、少しずつ重点の置き所をずらせながら論ずることにより、全体として十全な論考を提示しようとするわけで、これも周到さのあらわれと言つてよからう。

このように、総じて丁寧慎重な物言いが基調であるが、しかもそれだけで終わっているのではもちろん無く、随所に新見が示されている。

そのいくつかを挙げれば、Ⅳ―Ⅱではスサノヲに相對したアマテラスが身に着けた玉について、これを集合体であるところに武器としての機能を見ようとする。またウケヒの結果の男女の記紀での違いにも首肯すべき意見が提示されている。Ⅴ―Ⅱ焼石に焼き殺されたオホナムチの治療につき、貝が火傷の薬である理由を女性生殖器との連想に由来する力能とする。

これらは比較的細かい問題で、概ね穏やかなものといえるが、もっと大胆なものも少なくない。例えばⅥ―Ⅱではアメノヒボコの伝承について、朝鮮半島・中国のみならず、遠くインド・エジプトにまで視野を広げたりえて、これを『日光感精説話』と『卵生説話』が接合されたものと断じた上で、構成要素の多寡に基き伝承成立の新旧を、書記より古事記へと見る。またⅥ―Ⅲで、アメノヒボコの名を太陽神の男根とする。これまであまり多く触れられないところだが、説話内容と神名とを連関させて考察しており、ヤチホコを男根とする見解とともにあるべき論であらうと思

う。この章ではさらに当該伝承と応神記との関連を説いて古事記三巻構成成立の問題は「宣長に帰るべき」というまでに論が及んでもいる。Ⅴ―Ⅲでは大年神系譜に「稲作文化の朝鮮半島より我が国への伝来を語ろうとしたものであること」を読み取るという、これもまたかなり大胆な推論を試みている。

著者はさらに、眼前にないもの——記紀に明瞭には見られない神話を類推して提示するという挑戦的精神をも示している。それは生の起源を説明した神話や、星の神話の存在の追及といういずれも相当に重いテーマである。

こういった意欲的なテーマへの取り組みは、しかし必ずしも全てが成功ばかりとは言えない部分もあり、また言うまでもないことながら、著者と評者とはよって立つ場が違うわけで、評者の立場からはかならずしも意見を同じくしないものもある。

例えば著者が本書を通じて再三触れているテーマである「生の起源説明神話」について言えば、確かにその生の起源に至る類推にはユニークで興味深いものがあるが、真実を包み隠しているべールを限なく取り払うにはいまだ少しの掘り下げを要しよう。著者は、記紀に見られない人類発生の神話について、植物から人類が出現したと類推しており、その一連の考察のなかで(Ⅲ―Ⅲ)桃太郎・瓜子姫・竹の子童子・竹姫などが植物から人間の誕生した話として取り上げているが、桃太郎や、瓜子姫などは類話に「彊」から出てきたとするものもあるようで、竹も併せて「中空の容器」という範疇に含まれる可能性もあらう。殊に桃には子宮のイメージが伴うことでもあり、これらを植物一般と括ってウマ

シアシカビヒコヂ・タカギと同列にしてよいかどうか、いささかの疑問なしとしない。アミノミハシラや「根国」の「根」の語の根源の意味を問うといった、重要かつ魅力的な立論の前提部分であるだけに気懸りである。

以上、読みの至らない点多く、未だ触れるべきことを尽くしたとも言いが、既に与えられた紙幅も尽きたのでこのあたりで筆を擱くことにする。最後いささか批判めいた物言いになったが、これも著者の取り組もうとしているテーマがいずれも重要なものであるだけに、より強固な揺るぎ無いものとなるのを念じてのこ

とで、あるいは評者自身の力不足から十分に著者の意を汲み取れないことによる妄言であるかも知れず、いずれも他意のないところを了解願いたい。最後に本書が学界、殊には我々後学のものの一つの範を示すものとなるであろうということを重ねて記して本稿を閉じたい。なお文中著者に対して敬語表現を取らなかった。記述が煩瑣になるのを避けたためであるが、先学に対して礼を失したことをここにお詫び申し上げる。

(昭 63・6 六興出版 A 5 判 五〇五頁 六八〇〇円)

新刊紹介

稻垣達郎著

『松前の風』

日本近代文学研究の泰斗であった稲垣達郎先生の遺文集の一つである本書は、日常生活の中の些細な身辺雑記、生い立ちや交友録などを中心にした回想・同時代の文学や社会状況をめぐる寸評といった随筆か

ら、書評・文芸時評・全集解説、そして論文まで、多岐・多年に亘る事績を収載している。

一定の方向性を定めずに様々な種類の文章を集成することによって構成された本書の存在は、狭い枠組みに囚われて物理的な作業に齟齬することなく、自由闊達に文学研究に進出した筆者の全体像の大きさを後進の者に窺わせて十分なものになっている。

筆者が対象と向かい合う時に生動してくる鋭い見識に基づいた洞察力と暖かいまなざしの持っている射程は、作者と作品の間に成立する関係やその背景に広がる文学の諸問題に留まらずに、人間存在全体に及んでいて、人間の学としての文学の意義と役割の重要性を読者に対して示唆している。

(昭 63・9 講談社 四六判 四六一頁

三八〇〇円)

〔小宮健一〕